

臨床看護学・助産学専攻科

1 構 成 員

	平成23年3月31日現在
教授	2人
准教授	2人
講師(うち病院籍)	6人 (0人)
助教(うち病院籍)	9人 (0人)
助手(うち病院籍)	0人 (0人)
特任教員(特任教授、特任准教授、特任助教を含む)	0人
医員	0人
研修医	0人
特任研究員	0人
大学院学生(うち他講座から)	28人 (0人)
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員(教務職員を含む)	2人
その他(技術補佐員等)	0人
合計	49人

2 教員の異動状況

野澤 明子(教授)	(H9.4.1 採用、H13.8.1～現職)
大見サキエ(教授)	(H16.4.1～H17.3.31 助教授；H17.4.1～現職)
久保田君枝(准教授)	(H17.4.1～現職)
永井 道子(准教授)	(H16.10.1～H20.7.31 講師；H20.8.1から現職)
安田 孝子(講師)	(H16.4.1～現職)
宮城島恭子(講師)	(H14.1.1～H17.3.31 助手；H17.4.1～現職)
佐藤 直美(講師)	(H9.8.1～H18.3.31 助手；18.4.1～現職)
倉田 貞美(講師)	(H18.6.1～現職)
中川(稲勝)理恵(講師)	(H21.4.1 採用、現職)
武田 江里子(講師)	(H21.4.1～現職)
杉山 琴美(助教)	(H.16.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職)
足立 智美(助教)	(H.16.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職)
五十公野由起子(助教)	(H.18.5.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職, H.22.10.8～産休・育休)
牧野 公美子(助教)	(H18.4.1～H19.3.31 助手；H19.4.1～現職)
坪見 利香(助教)	(H19.4.1～現職)
河島 光代(助教)	(H21.11.1～現職)

田坂 満恵 (助教) (H22.4.1～現職)
 廣岡 亜美 (助教) (H22.7.1～現職)
 佐藤 裕紀 (助教) (H22.10.8～教務補佐員；H23.1.11～現職)
 村上 静子 (教務補佐員) (H21.4.1～現職)

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成22年度
(1)原著論文数(うち邦文のもの)	5編 (3編)
そのインパクトファクターの合計	2.55
(2)論文形式のプロシーディングズ数	7編
(3)総説数(うち邦文のもの)	2編 (2編)
そのインパクトファクターの合計	0.00
(4)著書数(うち邦文のもの)	11編 (11編)
(5)症例報告数(うち邦文のもの)	0編 (0編)
そのインパクトファクターの合計	0.00

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sato N, Kageyama S, Chen R, Suzuki M, Mori H, Tanioka F, Yamada H, Kamo T, Tao H, Shinmura K, Nozawa A, Sugimura H: Association between neuropeptide Y receptor 2 polymorphism and the smoking behavior of elderly Japanese. J Hum Genet 55: 755-760, 2010.
2. 牧野公美子, 渡邊泰秀: 地方都市消防職員の惨事ストレスに影響を与える要因, トラウマティック・ストレス, 9(1), 61-69, 2011.

インパクトファクターの小計 [2.55]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. Suzuki M, Tatsumi A, Otsuka T, Kikuti K, Mizuta A, Makino K, Kimoto A, Fujiwara k, Abe T, Nakagomi T, Hayashi T, Saruhara T: Physical and Psychological Effects of 6-Week Tactile Massage on Elderly Patients With Severe Dementia, American Journal of Alzheimer's Disease & Other Dementias, 25(8), 680-686, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 工藤真由美, 中山洋子, RiiTTA MeReTOJA, 石井邦子, 石原昌, 大平光子, 戸田肇, 大見サキエ, 小松万喜子, 松成裕子, 東サトエ, 田村正枝, 永山くに子, 土居洋子, 丸山育子: フィンランド語で開発された看護実践能力を測定する尺度(質問紙)の翻訳の等価性の検討, 福島県立医科大学看護学科紀要 13号, 19-30, 2011
2. 丸山育子, 松成裕子, 中山洋子, 工藤真由美, 石井邦子, 石原昌, 大平光子, 大見サキエ,

小松万喜子、田村正枝、土居洋子、戸田肇、永山くに子、東サトエ、黒田るみ：看護系大学卒業の看護師の看護実践能力を測定する「看護実践能力自己評価尺度（CNCSS）」の適合度の検討、福島県立医科大学看護学科紀要 13 号、11-18. 2011

インパクトファクターの小計 [0.00]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Sato N, Kageyama S, Chen R, Suzuki M, Tanioka F, Kamo T, Shinmura K, Nozawa A, Sugimura H: Association between neurexin 1 (NRXN1) polymorphisms and the smoking behavior of elderly Japanese. Psychiat Genet 20: 135-136, 2010.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 鈴木夏奈子、竹内久枝、坂下知佳、稲垣陽子、佐藤直美、野澤明子：慢性腎臓病患者に対する指導の充実を図る取り組み（第1報）、第41回日本看護学会論文集成人看護学Ⅱ、152-155、2011
2. 中山洋子、石井邦子、石原昌、大平光子、大見サキエ、工藤真由美、黒田るみ、小松万喜子、田村正枝、土井洋子、戸田肇、永山くに子、東サトエ、松成裕子、丸山育子：看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究—臨床経験1年目から5年目までの看護系大学卒業看護師の実践能力に関する横断的調査—、平成18年～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書 全61項. 2010
3. 三浦絵莉子、大見サキエ、坪見利香、河合洋子、金城やす子、加藤千明、中島怜子、泉真由子：アメリカNY州における小児がん患者の復学支援の現状②—Schneider Children's Hospitalにおける復学支援プログラム—、小児看護、第22巻第4号、531-536, 2010
4. 金城やす子、大見サキエ、坪見利香、三浦絵莉子、河合洋子、加藤千明：アメリカNY州における小児がん患者の復学支援の現状③—The Cancer center for Kids at Winthrop—University Hospitalにおける小児がん支援システム—、小児看護、第33巻第6号、808-813、2010
5. 河合洋子、大見サキエ、坪見利香、三浦絵莉子、金城やす子、加藤千明：アメリカNY州における小児がん患者の復学支援の現状④—The Leukemia & Lymphoma Societyにおける復学支援と教育を必要とする子どもの権利—、小児看護、第33巻第7号、944-948.2010
6. 島田三恵子、足立智美、神谷整子、瀬川昌也、早瀬麻子、乾つぶら、坂口けさみ. 乳児における夜間の就寝時刻が最長睡眠時間の長さに及ぼす影響, 小児保健研究, 69(5), 685-689, 2010.

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 佐藤直美：日々の実践に生かすがん遺伝看護 基礎知識①-⑤. ナーシング・トゥデイ 25: 28-32, 2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 長澤利枝、松尾ひとみ、深江久代、稲勝（中川）理恵：災害看護教育の現状と新カリキュラムへの課題、看護教育 Vol.51 No.7、588 - 589、2010.

インパクトファクターの小計 [0.00]

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 野澤明子、健康信念モデル、セルフマネジメント能力を高める方法、セルフマネジメントを促すための教育的支援、(鈴木久美、野澤明子、森一恵編)、成人看護学慢性期看護、南江堂、東京、pp.68-70、pp.77-82、pp.83-94、2010
2. 野澤明子、成人学習を支援する、(林 直子他編)、成人看護学成人看護学概論、南江堂、東京、pp.165-170、2011
3. 野澤明子、5 循環機能障害に伴う成人への援助、11 認知機能・コミュニケーション障害に伴う成人への援助、12 運動機能障害に伴う成人への援助、(井上洋士・佐藤禮子編)、成人看護学、放送大学教育振興会、東京、pp.81-106、pp.194-218、pp.219-241、2010
4. 佐藤直美：脳・神経系の障害を有する人とその家族への援助 筋萎縮性側索硬化症、重症筋無力症、成人看護学慢性期看護 (鈴木久美、野澤明子、森一恵 編集), 南江堂、pp436-453、2010
5. 稲勝（中川）理恵：第4章3 ペースメーカを装着している患者の援助、看護学テキスト NiCE, 成人看護学 慢性期看護 病気とともに生活する人を支える (鈴木久美、野澤明子、森一恵編)、133 - 141、南江堂、2010.
6. 稲勝（中川）理恵：第5章2 不整脈、看護学テキスト NiCE 成人看護学 慢性期看護 病気とともに生活する人を支える (鈴木久美、野澤明子、森一恵編)、241 - 246、南江堂、2010.
7. 大見サキエ：第3章 疾患や機能障害にかかわるメンタルヘルス：Section 1 慢性疾患の子ども 編者：草場ヒフミ、小児看護ベストプラクティス 小児のメンタルヘルス； 中山書店、68-81、2010.
8. 坪見利香：第3章 疾患や機能障害にかかわるメンタルヘルス：Section 2 先天性疾患のこども 編者：草場ヒフミ、小児看護ベストプラクティス 小児のメンタルヘルス； 中山書店、82-91、2010.
9. 武田江里子：第5章ハイリスク新生児の病態とそのケア、3. 分娩損傷：助産師基礎教育テキスト第7巻 (遠藤俊子編集)、p216 -219、日本看護協会出版会、2011

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの (学内の共同研究)

1. 尾島俊之、巽あさみ、西山慶子、安田孝子、倉田貞美、菊地慶子、他：保健指導ノート 2011
公衆衛生の現状、高齢者保健福祉、10-1 - 10-12、日本家族計画協会、2010 年
2. 尾島俊之、巽あさみ、西山慶子、倉田貞美、安田孝子、菊地慶子、他：保健指導ノート

2011. 公衆衛生の現状、血圧の状況、肥満の状況、喫煙の状況、思春期の喫煙と飲酒、5-9-5-21、日本家族計画協会、東京、2011.

4 特許等の出願状況

	平成22年度
特許取得数(出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成22年度
(1)文部科学省科学研究費	8件 (790万円)
(2)厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3)他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4)財団助成金	1件 (300万円)
(5)受託研究または共同研究	1件 (45万円)
(6)奨学寄附金その他(民間より)	0件 (0万円)

(1) 文部科学省科学研究費

1. 大見サキエ(代表者) 基盤(C) がんの子どもの教育支援プログラムと連携システムに関する 基礎的研究(継続) 50万円
2. 坪見利香(代表者) 挑戦的萌芽 小児科外来看護師の発達障害児への対応の現状と課題に関する基礎的研究(継続) 50万円
3. 宮城島恭子(代表者) 若手(B) 小児がん患者と周囲の人との疾患に関するコミュニケーションを支えるための基礎的研究(新規) 110万円
4. 佐藤直美(代表者) 若手研究(B) 外来化学療法を受ける進行がん患者の適応に至るプロセス 50万円(継続)
5. 五十公野由起子(代表者) 若手研究(B) 救急外来におけるDV被害当事者への看護実践モデルの考案 7.8494万円(継続)
6. 久保田君枝(代表者) 基盤研究C、低出生体重児の増加と妊娠中の栄養状態の関連についての研究 80万円(継続)
7. 足立智美(代表者) 若手研究(B) 妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連 273万円(新規)
8. 牧野公美子(代表者) 若手研究(B) 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討 169万円(新規)

(4) 財団助成金

1. 佐藤直美(分担者) 肺がんの遺伝子多型 喫煙科学研究財団研究助成 300万円(継続)
代表者 病理学第一 相村春彦

(5) 受託研究または共同研究

1. 大見サキエ（代表者） 日本看護学教育学会研究助成 看護系大学における教養教育のあり方に関する研究－教養教育に関する教員の認識－

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	1件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	3件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	8件
(6) 一般演題発表数	1件	

(1) 国際学会等開催・参加

5) 一般発表

ポスター発表

1. Kurata S: Perceptions of physical restraint of home-dwelling elders by home care providers, International Federation on Ageing 10th Global Conference, 3-6 May 2010, Melbourne

(2) 国内学会の開催・参加

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 久保田君枝、第41回日本看護学会—母性看護—教育講演Ⅰ「増えるやせ妊婦」2010年

4) 座長をした学会名

1. 久保田君枝 第51回日本母性衛生学会
2. 久保田君枝 第25回日本助産学会
3. 久保田君枝 第22回静岡県母性衛生学会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 野澤明子、日本慢性看護学会、評議員
2. 大見サキエ 日本小児看護学会 評議委員 専任査読委員
3. 大見サキエ 日本看護学教育学会 評議委員
4. 大見サキエ 日本看護医療学会 専任査読委員
5. 大見サキエ せいらい看護学会 評議委員
6. 稲勝（中川）理恵 日本糖尿病教育・看護学会 専任査読委員
7. 久保田君枝 日本看護医療学会 査読委員
8. 久保田君枝 静岡県母性衛生学会 理事

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数(レフリース数は除く)	0件	0件

9 共同研究の実施状況

	平成22年度
(1)国際共同研究	0件
(2)国内共同研究	10件
(3)学内共同研究	1件

(2) 国内共同研究

1. 中山洋子、大見サキエ、他 13 名：看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究－面接による縦断的調査－
2. 大見サキエ、坪見利香、他 7 名：看護系大学における教養教育のあり方に関する研究－教養教育に関する教員の認識－
3. 大見サキエ、宮城島恭子、坪見利香、岡田周一（小児科）、河合洋子（宝塚大学）、鈴木恵理子（淑徳大学）、濱中喜代（東京慈恵医科大学）：がんの子どもの教育支援プログラムと連携システムに関する基礎的研究
4. 大見サキエ、高橋由美子、坪見利香、宮城島恭子、佐鹿孝子、久保恭子、坂口由紀子（埼玉医科大学）、石田寿子：学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセスの妥当性の検討
5. 坪見利香、大見サキエ、杉江秀夫（自治医科大学）、高崎順子（鈴鹿市立教育研究所）：外来看護師の発達障害児への対応の現状と困難さをきたす要因の検討
6. 佐藤直美 喫煙行動と遺伝子多型の関連 相村春彦（病理学第一）、谷岡書彦（磐田市立総合病院検査科）
7. 松尾ひとみ（静岡県立大学短期大学部）、稲勝（中川）理恵、遠藤久美（静岡県立静岡がんセンター）：自家組織による乳房再建術を経験する乳癌患者への看護の可能性の探究
8. 鈴木みずえ、牧野公美子、菊地慶子、木本明恵（日本スウェーデン福祉研究所）、中込敏寛（日本スウェーデン福祉研究所）：タクティールケア認定取得者アンケート調査における“触れるケア”の効果と意義の検討
9. 鈴木みずえ、牧野公美子、菊地慶子、木本明恵（日本スウェーデン福祉研究所）、林辰弥（三重県立看護大学）：家族介護者に対するソフトマッサージの有効性
10. 倉田貞美、牧野公美子、村上静子 梅林ゆきえ（浜松北病院）、芥川知奈（浜松北病院）：一般病院に入院する高齢者への不必要な身体拘束を解除する看護モデルの構築

(3) 学内共同研究

1. 大見サキエ、山本恵美子、牧野公美子、宮城島恭子、木山幹恵、加藤和子：医療安全教育に関する取り組みの現状と看護職のニーズ

10 産学共同研究

	平成22年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 精神科デイケアにおける家族への看護支援の現状と影響する要因

現在、わが国には受け入れが整えば退院できる社会的入院患者は約7万人いる。退院を促進し、地域での生活を可能にするには、患者を支える家族への看護が必要である。本研究では精神科デイケアに勤務する看護師にインタビュー調査を行い、家族への看護支援の現状とそれに影響を与える要因を明らかにした。分析の結果、看護支援の内容として「家庭状況への関心」、「家族支援活動の周知」、「家族関係修復の支援」、「家族の感情表出の促進」、「メンバー理解の促進」、「他職種との連携」が抽出された。家族への看護支援には「支援の方法に工夫を要する家族」、「家族支援に対する看護師の心の揺らぎ」、「他部署への委譲」が影響を与えていた。

(三森康雄, 永井道子)

2. 外来看護師の発達障害と診断・推測される子どもへの対応に関する全国調査

質問紙調査から一般の医療機関の小児科・耳鼻咽喉科外来の看護師の約7割が発達障害児への対応の困難さを感じていることが明らかになった。診療場面での対応困難な状況は、小児科よりも耳鼻咽喉科看護師がより強く感じていた。また、耳鼻咽喉科では、発達障害のある子どもの個別の特徴を踏まえた関わりや家族に対する心理的配慮の等の援助を強化の必要性が明らかになった。

看護師は、発達障害に関して高い関心を示していたが、研修の機会が非常に少なく、専門性を高めるには困難な現状であることが示唆され、身体的・心理的に負担のかかる受診のなかで示す子どもの様々な反応やニーズにいかに対応すべきかについては、障害の概念の説明や包括的な支援の在り方などの一般的な内容のみならず他領域は違った看護独自のアプローチ方法の開発が必要であることが示唆された。

(坪見利香, 大見サキエ)

3. 外来化学療法を受ける進行がん患者の適応に至るプロセス

外来で化学療法を受ける進行がん患者が治療をどのように生活に組み込み、適応していくかを質的研究手法を用いて明らかにすることを目的とした研究である。データ収集中で今後解析も併行して行う予定である。

(佐藤直美, 野澤明子, 稲勝(中川)理恵)

4. 高齢者における Neuropeptide Y receptor 2 (NPY2R) 遺伝子多型と喫煙行動との関連

約2500名の60歳以上の外来患者を対象にニューロペプチドYレセプター2(NPY2R)遺伝子多型と喫煙行動との関連を検討した。この多型 rs4425326 の C allele 保有男性が現在

喫煙者に有意に多いものの、ニコチン依存の程度は有意に低いという結果となり、この多型が喫煙行動に関連する可能性を示した。先行研究ではヨーロッパ系白色人種において NPY2R 遺伝子多型がコカイン依存やアルコール依存と関連するという報告があるが、喫煙行動については初めての報告となり誌上発表を行った。

(佐藤直美, 影山信二¹, Chen Renyin¹, 鈴木雅也¹, 谷岡書彦², 加茂隆春¹, 新村和也¹, 野澤明子, 相村春彦¹)¹ 病理学第一 ² 磐田市立総合病院検査科

5. 急性心筋梗塞患者の家族員への看護の探究

以前より、急性心筋梗塞患者の家族員における病いの経験を、現象学の思考をもとにつまびらかにし、看護実践の可能性を探求している。平成 22 年度は、急性心筋梗塞を思い低心機能となった患者の配偶者(妻)の経験を、彼女の語りより紐解き、急性心筋梗塞患者の配偶者へのケアを探究してきた。

(稲勝(中川)理恵)

6. 自家組織による乳房再建術を経験する乳癌患者への看護の可能性の探究

文献検討より、乳房再建術は患者にとって有益な方法の一つではあるが、普及の段階にあることから、医療者によるケアが患者の状況と一致していない側面がみられ、ケアの開発が今後の課題と考えられた。そこで平成 22 年度は、前年度に引き続き、ある看護理論に基づく看護実践の有用性を検討するとともに、その理論をふまえた、乳房再建術を経験する乳癌患者へのケアを探求し、成果を投稿した。

(松尾ひとみ¹, 稲勝(中川)理恵, 遠藤久美²)¹ 静岡県立大学短期大学部、² 静岡県立静岡がんセンター

7. 救急外来における DV 被害当事者への看護実践モデルの考案

救急外来は、医療機関の中でも DV 被害当事者が来院することが多いといわれる科の一つである。この救急外来での DV 被害者に対する看護実践モデルを考案することを目的に研究を行った。本年度は、民間団体・市町村の DV 被害者に対する支援・相談業務に携わっている支援者に対し行ったインタビュー調査結果を分析した。支援者達は、DV 被害当事者の揺れ動く気持ちを理解して共感する態度で接し、DV 被害当事者が今後の生き方を自分自身で決められるよう自己決定を促す関わりを行っていることがわかった。今後も引き続き、インタビュー調査を進めていく。

(五十公野由起子)

8. 低出生体重児の増加と妊娠中の栄養状態の関連についての研究

近年、女性のやせ傾向や低出生体重児の増加が問題とされ、その関連が注目されている。そこで妊娠中の胎児発育、出生体重と妊婦の栄養摂取状態について縦断的調査研究を行った。(1) 対象妊婦：食事調査に承諾の得られた妊婦 245 名中出産を終了していない 45 名は継続調査中である。(2) アンケート調査：1) 初回受診時と母親学級受講時に行う。妊娠期間

中の妊婦の体重および胎児の推定体重の測定（妊娠 14～16 週、妊娠 25～27 週、妊娠 32～34 週）(3) 食事調査：妊婦に上記週数の期間に 3 日間の食事摂取内容をデジタルカメラにて撮影、分析は『ヘルシーメーカー 413』を使用し、栄養素別摂取量と栄養素別エネルギー比率を算出した。結果、(1) 妊娠初期アンケート妊婦 1244 名の BMI は 25 以上の肥満 6.2%、25～18.5 以上標準 71.5%、18.5 未満のやせ 22.3% でやせの割合が多く、また妊婦 1254 名中、ダイエット経験者の割合は 644 名（51.2%）で多い傾向を示した。(2) 食事調査妊婦の食事摂取状況は、総じて高脂質・高食塩の傾向が顕著であり、総エネルギー量、Fe、レチノール、VC、葉酸などは低い傾向がみられた。(3) 妊婦の食事摂取内容と出生体重との検定結果、蛋白質と出生体重は $p < 0.01$ で有意となり、相関係数 $r = 0.733$ でかなり強い相関があった。(4) 出生体重と母体の体重増加との関係において弱い相関があった。(5) 現時点では低出生体重児は 16 名であった、全妊婦の出産を待って最終的な解析を行う予定である。
(久保田君枝、内藤初枝、金山尚裕、伊東宏晃、安田孝子、足立智美)

9. 妊娠による母親の禁煙と関連要因

健やか親子 21 の中間評価として「親と子の健康度調査アンケート」を実施し、妊娠中に禁煙をした母親について母親の妊娠中の禁煙率と乳児健診時の再喫煙率、母親が再喫煙する要因の分析を行っている。この研究は、「健やか親子 21 を推進するための母子保健情報の利活用に関する研究」（研究代表者 山縣然太郎）の一環として行った。今後論文発表をしていく予定である。

(安田孝子、尾島俊之¹、中村美詠子¹、山縣然太郎²) ¹健康社会医学講座 ²山梨大学大学院医学工学総合研究部

10. 妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連

妊婦の姿勢とマイナートラブル・産科異常との関連を明らかにすることを目的に妊娠初期の妊婦の姿勢とアンケート調査を実施した。今後、妊娠後期と産後のデータ・成人女性のデータ収集を続け、姿勢分析結果とトラブル・異常間について統計解析を実施する。

(足立智美)

11. 一般病院に入院する高齢者への unnecessary 身体拘束を解除する看護モデルの構築

近年、身体拘束は深刻な廃用性の機能障害を生むばかりか、尊厳を著しく脅かす人権侵害行為と認識されている。多くの医療処置が実施されている一般病院では、医療処置を安全に遂行し生命を守るために、身体拘束以外にどのように看護対応すればよいのかが確立していない。そのため、弊害や人権侵害であると思いつつも、身体拘束をせざるを得ない現実に苦しむ看護師は多く、一般病院における unnecessary 身体拘束を防止する具体的な対応策の確立が強く望まれ、看護上の差し迫った課題となっている。

そこで、A 病院の看護部との共同研究として、パーソンセンタードケアの研修会、認知症高齢者との超コミュニケーション法：バリデーシオンの研修会を計 5 回、ワークショップを 2 回開催した。また、病棟で身体拘束を実施している 4 事例についてパーソンセンター

ドケア等の視点から検討会を計6回開催し、看護ケア計画の策定と実践を行った。今後、身体拘束減少効果と看護師の認識の変化を検証する予定である。

(倉田貞美、牧野公美子、村上静子)

12. 認知症高齢者のエンドオブライフ・ケア充実に向けた家族ケア実践能力育成に関する検討

介護老人保健施設における認知症高齢者の介護家族に対するケアの現状とニーズを把握し、より効果的な家族ケアを行うための展望を示す。さらに、看護師に対する認知症高齢者のエンドオブライフ・ケアの教育実態とニーズを把握することを目的に自記式質問紙調査を実施した。研究協力が得られた東海エリア43施設と北陸エリア19施設に対して、調査書類一式(協力者用説明文、介護家族用・看護師用質問紙、返信用封筒)を送付し、各施設から調査対象者(介護家族、看護師)に配布した。調査対象者には研究の主旨及び方法・倫理的配慮等について協力者用説明文に明記し、自由意志により参加の同意を得た。郵送法にて回収した。介護家族462名、看護師462名からの返送があった。次年度には、異なる地域である甲信越エリアで同様なアンケート調査を施行し、調査したエリア(3地域)のデータ整理・統計学的分析を行う。

(牧野公美子、倉田貞美)

13. タクティールケア実践者のケア意識の因子構造とその関連要因

タクティールケアはスウェーデンで開発されたタッチとマッサージの中間的な位置づけにあるケア方法で、対象者の手や足・背中を柔らかく包み込むように触れる。本調査では、タクティールケアIコース認定取得者のケア意識について因子分析を行い、その関連要因を明らかにした。タクティールケアIコース認定取得者476名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施し、調査研究に同意した207名(回答率43.5%)から回答を得た。調査項目は実施年数や頻度、実施対象者、タクティールケアに関する意識などである。今後、研究成果を発表していく予定である。

(牧野公美子、鈴木みずえ、菊地慶子、木本明恵、中込敏寛)

14. 慢性腎臓病(CKD)患者に対する指導の充実を図る取り組み

慢性腎臓病患者の指導の現状を環境要因の構造から捉えた取り組みを展開する事は、患者指導における問題状況の解決・改善を図り、看護師の意欲向上につながることを明らかにする目的で、実践的アプローチを展開した。その結果、この取り組みによってCKD患者指導に関わる看護師において現状の問題に対する具体的・実践的な知識や技術の習得、指導・学習意欲の向上などの成果が認められた。

(鈴木夏奈子¹、竹内久枝¹、坂下知佳¹、稲垣陽子¹、佐藤直美、野澤明子)¹磐田市立総合病院

15 新聞、雑誌等による報道

1. TV報道:「やせ願望にご用心」NHK『あさイチ』2011年1月27日(久保田君枝)

2. 記事：「朝食抜く やせ妊婦」読売新聞（朝刊）2010年6月30日（久保田君枝）
3. 記事：「命の神秘、大切さを学ぶ」中日新聞（朝刊）2010年12月10日（久保田君枝）